●はじめに
・本作品はフィクションであり、実在の人物、思想、団体いかなるものとも無関係です。
また、本作品内の描写の全ては、現実での行為を推奨するものではありません。

・無断転載、複製、複写、インターネット上への掲載などを一切禁じます。

2019/8/23 いと けいと

第三次世界大戦の過激化に伴う男性の重用により、過去の男女平等などという[redacted]な世論は覆された。
'外'と同じように、この軍事基地においても男性に逆らう女性には厳しい[redacted]処罰を与えられる。

軍人たちの性処理用には売春婦たちが出入りするが、それだけでは飽き足らない特殊嗜好の軍人たちにより、'地下'には拷問部屋が作られた。
それに興味を示した基地内の研究職たちが参入し、出産用奴隷の開発や性器改造などが行われていった。
今や地下の性処理施設は、基地の中でれっきとした立ち位置を確立している。

収容されている奴隷たちには１体ずつ基本情報や改造記録の資料が作られ、管理される。
以下は、カテゴリ「性処理用奴隷」のデータの一部である。

矢月啓(やづき けい)
基本情報：S121345_B
162cm/54kg
B80-W56-H75
年齢：22歳

もともと高学歴のエリートで、戦争により奴隷として徴収されるまでは有名企業に努めていた。
空いた時間には年下の奴隷をよく気にかけており、面倒見の良い性格である。
基本的には大人しく施設職員に従うが、たびたび反体制的な言動も見られるため、取り扱いに留意。
XXXX年XX月XX日：追記
XX月XX日の予算委員会への接待に選出、××氏へと割当。
年齢的には××氏の好みを外れるようだが、その外見を気に入られたようだ。

鴻野純（こうの はすみ）
基本情報：S12181_A
159cm/50kg
B97-W54-H82
年齢:19歳

人当たりがよく、職員に対しても雑談をもちかけるような性格。
もともとスラムの風俗勤務であり、不安定な生活に辟易していたため「中」での生活をそれほど抵抗なく受け入れたらしい。
性欲旺盛で、物のように扱われる日常だとしてもこの奴隷にとってはさほど苦ではないようだ。
「外」から徴収してきた奴隷の中では非常に環境に適応している珍しい奴隷である。
XXXX年XX月XX日：追記
XX月XX日の予算委員会への接待に選出、××氏へと割当。
容姿・性格と淫乱さのギャップが気に入ったらしく、直接の指名。
古い倫理観を持つS121345_B：矢月啓との緩衝材としての働きも期待できる。

予算を増やすため、委員会の幹部たちへの
接待をセッティング。
接待用の奴隷は、カテゴリII（性処理用奴隷）
から選出。
追加の健診を踏まえて、幹部たちへ
それぞれ3体ずつほど充てがうこととする。

接待当日。
食事の席で、教育した性処理用奴隷に
接客させる。
それぞれの嗜好に沿うように奴隷を
分配し、個室で性的な接待をさせる。

予算委員会委員長
×× ××の客室記録。

××は口元を歪ませ、よく通る…
というよりは無粋とも言える大声で
奴隷たちを迎える。
口角は上がっているはずなのに
目は異様にギラつき、にこやかな印象が無い。
典型的な、性根の腐った人間の表情だ。

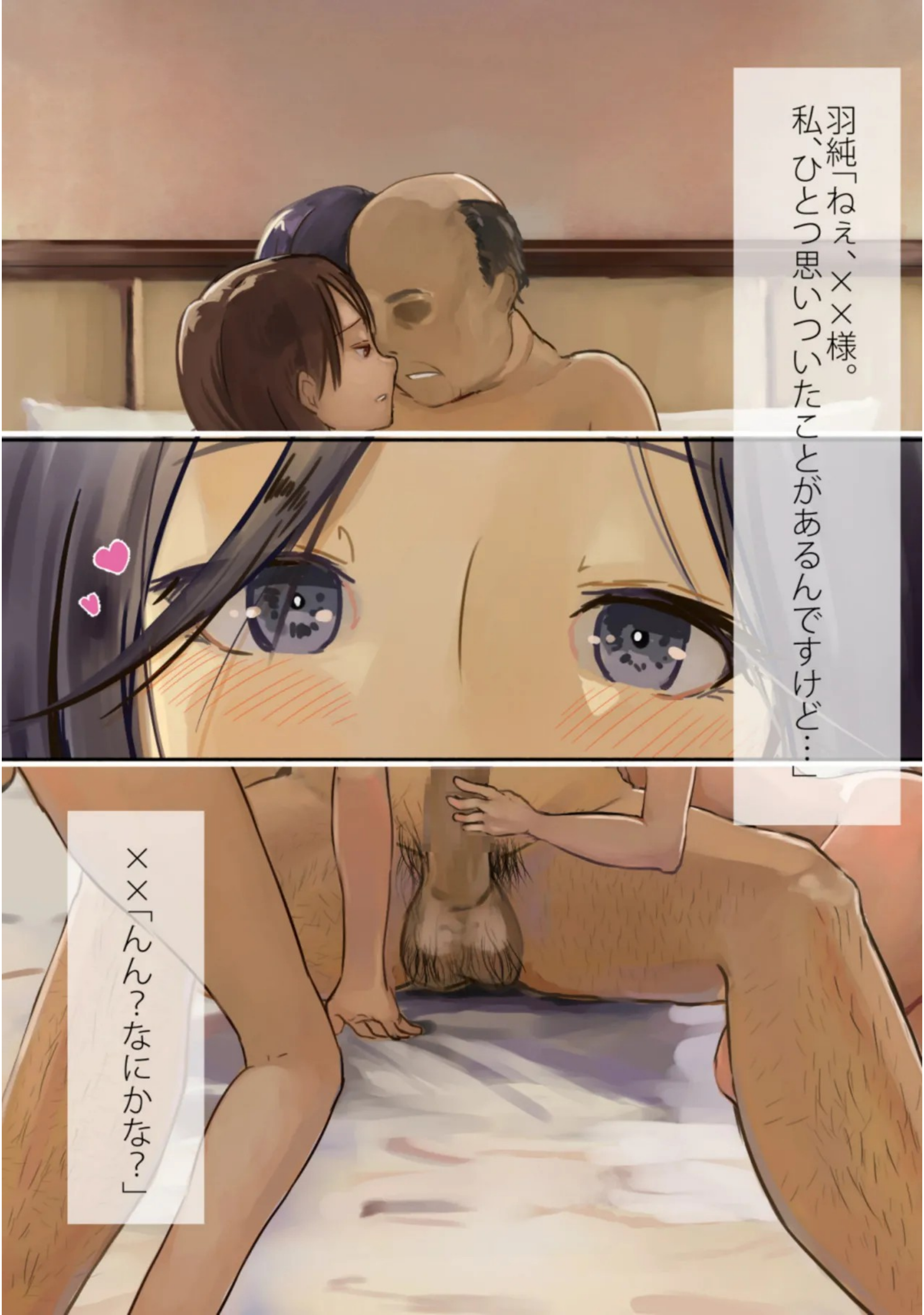
羽純「ほら、ベッドに…××様はどうぞ楽に。
私たちにお任せくださいね♥」

啓「ん…ちゅ、ふ…ぅ…」
リン「はぁ、ぁん♥」
羽純「ふふ…××様、耳きもちいですか…？
ほら、唇も…んっ…」

啓「…！××様、わ、私ともキ、キスしてください…
ほらリン、あなたはいいから…」
リン「えぇっ～！」
××「ふふ、啓ちゃんはずいぶん
積極的だねぇ」
羽純「…」

啓「ん……ふっ……ちゅ……」
啓は嫌悪感を隠しきれていない笑顔で
××の分厚く突き出た唇を必死に舐めとる。
啓の口腔に舌が無遠慮に侵入し犯していく。
ぬるぬるとした感触と脳まで犯される錯覚を他所に、
下からリンの弾むような声が響く。

××「なんだね、急に。反抗的じゃないか。」
羽純「申し訳ございません、××様。この子真面目なんです～」
××「あぁ…なるほど。若いのに古風なことだ。そんなことでは時代に取り残されてしまうよ？ハッハッハ！」
羽純「ふふ、××様が優しい人で良かった。」
啓「う…クッ…」
リン「ねぇ～なに難しいお話してるの？もっと気持ちいいことしたい～！」
羽純「そうね、リン…」


羽純「ねぇ、××様。
私、ひとつ思いついたことがあるんですけど…」
××「んん？なにかな？」

クス…
羽純「啓ちゃんに気持ちいいこと、
覚えさせてあげませんか？」
啓「なっ！？羽純、何言って…」
羽純「彼女経験があまり無いみたいだから…
身体が覚えれば早いと思うんです。」

リン「それすっごく良いっ！
啓ちゃんが乱れるところ見たーい
ね、ね、おじちゃんもみたいよねっ」♥
××「おお、おお、いいねぇ。じゃあ、今晩は
啓ちゃんで遊んであげよう」
啓「ヒッ…リ、リンまで…」
羽純「大丈夫、堕ちちゃえばあとは
気持ちいいだけだから…」
啓「い、いや…！」

××「そうだ、今日は啓ちゃんはローション禁止にしよう。本気汁まみれにして犯してあげようじゃないか」
グリッ
グリィ
ハァ
ハァ
啓「…っそんな、止めてください…っ!!」

××「おい、勘違いすんじゃねえぞ。
お前らは人間じゃ無い。
拒否権なんか無いんだからな？」
啓「ひぅっ……！は、はい……」
なおも首を振ろうとする啓に、××は凄んだ声を出す。
ニタニタと歪んでいた口角も脱力する。
立場の違いを分からせようという男の思惑通り、
啓は必死で従順な態度を見せる。
連れてこられたばかりの時に受けた懲罰…
3日間睡眠を与えられず、あらゆる生理的苦痛を
叩き込まれたことが脳裏によぎったのだろう。

××「そうそう、そうやって言うことを聞いていれば
良いんだ。じゃあ、しっかり濡らしてやらないとなぁ。
ほら、何かいうことは？」
啓「ありがとう…ございます…
申し訳ございませんでした…っ」
リン「ふふ、啓ちゃんごめんなさいできて
えらいの！
それじゃあリンは…はむっ！」

啓「ひあぁぁっ……!!」
リン「ん…む、おっぱい舐めてあげるね…♥
ちゅ、ぺろっ…」
リンは普段の口数の多さが嘘のように、夢中になって啓の乳首を舐めはじめた。
薄い布越しに体温の高い舌でちろちろと刺激され、啓の唇から抑えきれない声が漏れる。
ちゅぷ
ペロッ
ちゅ…

ぐず
啓「……ぅ、ぁ……おねが、リン……
そんなことしないで……」
リン「ん、なんでぇ？はむ……
けいちゃんのおっぱい……ん、こんなにふわふわで……
おいしいのに」

リン「…きもちよくない？」
啓「ちがっ…そういうことじゃな…ひぅっ…♥」
××「うんうん、健気でかわいい子たちじゃないか。
どれ、私も味見させてくれ…」

啓「……！ぅ……」
羽純「ほら啓、どこに当たってるか言って」
…ア！
啓「あ…、く…クリトリス…ぐりぐり、されて、る…ぁ♥」
リン「いいなぁ啓ちゃん、気持ちよさそう♥」
啓「う…ぁ…」
××「身体は正直ってこういうことを言うんだねぇ。あっという間におまんこぐちゃぐちゃだよ。」
ちゅぷ…♥

はっ
はっ
啓「あ〜〜…っ…ん、んん…！」
××「ほら、なんの抵抗もなく指が入っちゃったよ。
君、むっつりだねぇ。実はドMとか？」
啓「ちがいま、ぁ、あ…っ！」
ガクンッ
ガクッ
ツプ…ッ
クリトリスと乳首を責める動きが次第に早くなり、
くすぐるような刺激から確実に絶頂に導くための
刺激へと変わっていく。

あ
啓「あっ、も、だめ――」
啓「――く、あ、っ!!」
ガクガクッ!!
ガクンッ
バタッ
パタッ

リン「すごい、えっち…んぁ…♥」
羽純「まだまだ物足りなさそうね…」
啓「だ…め…、」
羽純「もっといじめてあげましょうね♪」
啓「あ…ぁぁ…！」
ゾク
ゾク
あ~
あ…
くちゅ
ちゅ

ー40分後。
羽純「あら、またイっちゃったわね…これで31…いえ、32回目だったかしら？」
××「連続でイって痙攣しっぱなしじゃないか。おまんこも物欲しそうにピクピクさせてるねえ？」

ガクガク
ガクン
はっ
啓「はーっ、はーっ、あーーっ……〜〜っ!!」
羽純「あら、酸欠になって答えられないみたい。かわいい♥」
ビク
―啓は疲弊し言葉を紡ぐだけの余裕はなかった。
それでも外陰部への刺激はどこか物足りないようで、切なげな声を上げている。
はっ
ビクンッ
ガクッ

××「あぁ、もうたまらん！そろそろ挿れさせてもらうぞ！」
ひぅっ⁉
啓「…あっ⁉まだ、イってる…‼」
グイッ‼
ドロッ…
ツプ…

啓「あああぁぁあああーーーー…っっ!?」
ゾクゾクゾクゾクッ
ピクッ
ビクーンッ
ばちゅんっ
あ
お

××「挿れただけでイッたのか…本当にスケベだなぁ…
くっ、膣内が痙攣しっぱなしだ…!」
啓「あ…あ、まだ動かさないで…———〜〜っ!!」
ガクンッ
はっ
ガクンッ
はっ
はっ

ズルル…
う、
まって
おねがい…
ズルルッ…
ズリュ…
啓「はあぁぁっ……んんんっ…」
ガクッ
あ…あああ…
ガクッ

ーーーッ!!!?
バチュンッ!!
ガクガクッ!
ズチュッ…!
××「クク…声も出ないかね？
このまま動かすぞ…！」
ガクンッ

パンッ
パンッ
パンッ
啓「まっ…て、待って、しきゅゴリって、しきゅう、
ゴリゴリしてりゅぁら、あ、ぁっ、ああ～～っ!!」
あっ
どちゅ
パンッ
羽純「大丈夫よ、だって今とっても
気持ちいいでしょう？」
啓「あ、あぁ、あ…き゛も ぢ い゛ぃ、
ぎもぢぃ…っ!!」
パンッ
あはっ♥
ズッ
ドスッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ひっ

××「うっ……!!」
はーっ
ビュルルッ
啓「あぁあぁぁっっ……!!
でてる…なかぁ…」
ドクンッ
ドクンッ♡
ゴポッ
コポッ
ドロォ…
ドピュッ
はーっ

××「あ、ぁ…」

羽純「うふふ…じゃあ次はこれ挿れちゃいましょうか♥」
はぁっ
はーっ
…?
啓「え、…な…なに…それ…」
はぁっ
はーっ

あは♥
羽純「実は準備してたの。啓ちゃんを鳴かせたくって……♪」
啓「ひ、ひ……や……やぁ……っ‼」
リン「わぁ～！おっきくてすごーい！♥」
××「おぉっ！これは楽しめそうじゃないか！」
羽純「でしょう？」

言いながら、羽純はローションを手に取り
啓のアナルに塗り込めていく。
はっ
ゼーッ
ゼーッ
ゼーッ
はっ
ビクンッ
クスクス…
羽純「ふふ…おまんこ汁溢れすぎて
ほんとにローションいらずね？」
啓「ま、まって…まってぇ…っ」
ゴポッ
トロッ

××「こらこら、啓ちゃん。
よそ見しちゃだめじゃないか」
くにっ
くにっ♥
啓「あっ・・・!!
ぐりどりしゅ・・・ごりってしちゃだめ・・・ぇ!!

啓「あっ、そこだめ、クリトリスだめぇあぁあぁあぁあ
あああっっっ!!!」
ふる
ふるっ
羽純「あら…また潮吹きしちゃってる。
…さ、このくらいでいいかしら。そろそろ挿れるわよ…」

びゅるっ!!
ビクンッ!…
××「あぁ…エッチな啓ちゃん見てたらまた勃ってきちゃったよ、ほら。
このまま挿れさせてもらう、よ！」
ズブブッ

××「物欲しそうに口を開けおって…」
啓「ふ、んん…ん、ぁ、んんんん…む、」
ぬるっ♥
ちゅっ
羽純「ほら、啓。バイブがそろそろ『奥』に当たりそうよ♥」
啓「え、」
べろ

啓「え、あ、ひう、あ…っ!?」
ゾクゾクゾクゾク…!!

啓「あ、あぁあああああ〜〜っ!!!」

羽純「S字結腸(おく)に届いたみたいね♥
腸液撒き散らして喜んでるわ。」
××「うぉっ！ははっ、これはすごいなぁ…っ、
痙攣とバイブに押された刺激で
持っていかれそうだ…！」

啓「ふーっ……ーーっ……!!」
リン「あっはは♥啓ちゃん悲鳴あげてる！
うまく息できなくて苦しいよね？
気持ちよすぎて辛いんだぁ♥」
あ……
フッ……
あ……
カクッカクッ
ぴしゃっ
カクンッ
……
ぷしゃっ…!
ピクッ
羽純「それじゃあ、動かしはじめますね♪」

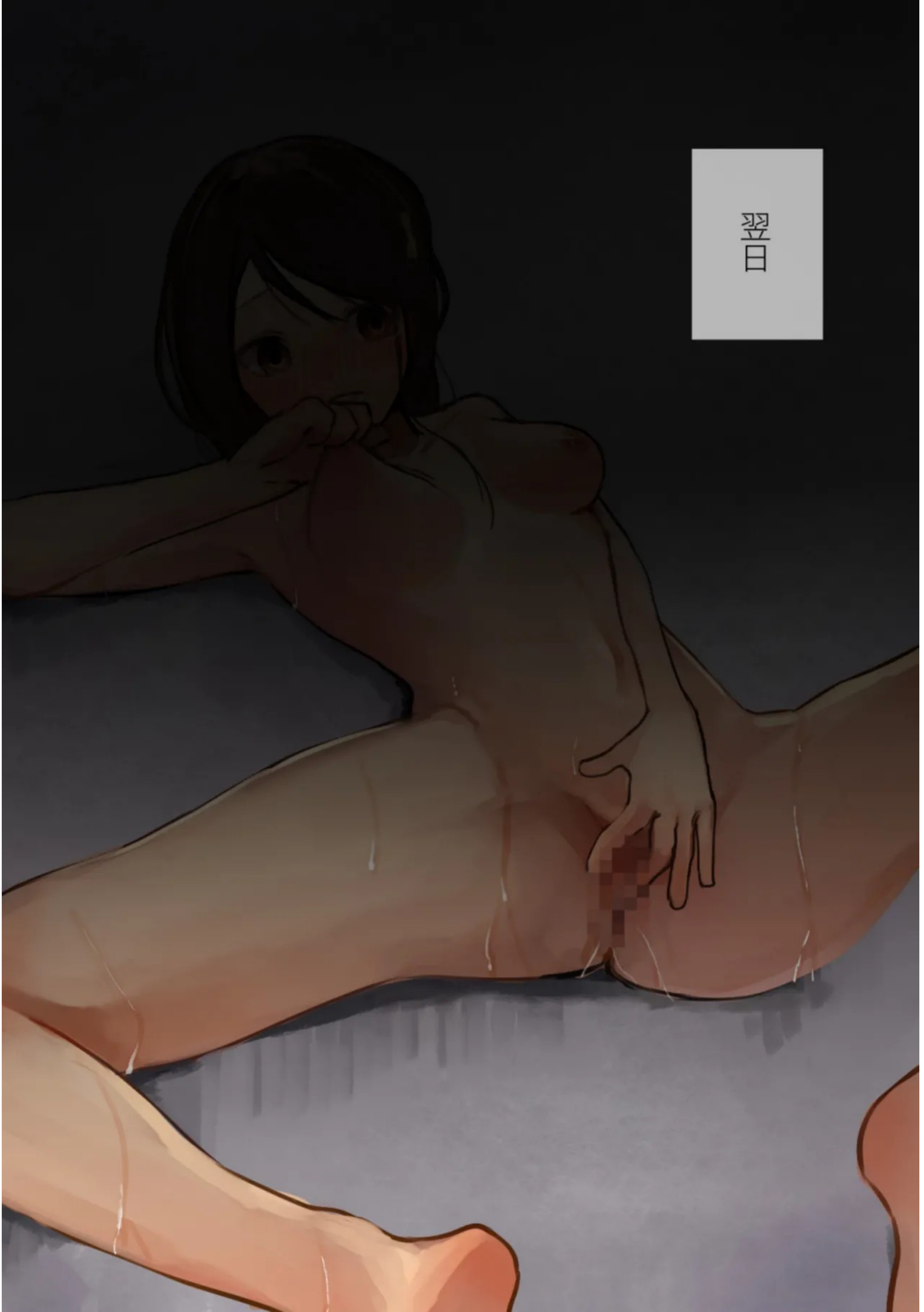
羽純「じゃあこっちもガンガン突いてあげないとね♥」
××「あぁ…いいぞ…っ!! もう射精るっ！射精るぞ！」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ぐちゃ
ぐちゅっ
ずちゅっ
ゴリッ
ゴリッ

啓「あ゛ぁ゛あ゛あっっ…でてるぅぅうぅぅ!!」
ドビュッ!!
ビュル…
ドクンッ
ドクッ
ビュルルル

羽純「痙攣でディルド押し出されちゃったわ…ふふ、ぽっかり2つも穴開けて、パクパクさせて…やらしい♥」
あは
あっ…
あ
あ…
啓「あ…ぁ…」

リン「ねぇ、次はリンが気持ちよくしてあげたい！」
啓「…え？」
ヒクッ
やぁ…
リン「ねぇ、ディルド貸して、羽純！」
羽純「ふふ、いいですよね、××様。」
××「あぁ、もちろんだとも。まだまだ物足りんわい！」
啓「あぁ、あ、ぁ…」
ヒクッ♥
ヒクッ♥

話しかけても反応がなく、痙攣が止まらない啓。
啓を使った「遊び」をすっかり気に入った××氏…
いや、羽純とリンを含む3人は朝までそれを
続けたのだった。


翌日

「検診結果を踏まえた啓への措置について」
性器と肛門が炎症を起こし赤く腫れ上がっている。
オナニーをするようになったため炎症が悪化しないよう注意・観察。
クチュ
ヌチュッ
あっ
あ
おまんこ♥
あっ♥
グチュ
グチュッ
あ♥
きもちいっ
いっ
またイクッ♥
また、妊娠が発覚したため手術のスケジュールを確保。
当奴隷は今回が初回の堕胎手術となるため精神的ショックに留意して取り扱うこと。

――記録終了。